



創刊
号

設立総会特集

小農学会設立総会

二〇一五年十一月二十九日

西日本新聞会館十階一号会議室

〈総会次第〉

- 設立報告 萬田 正治（鹿児島大学名誉教授）
- 基調講演 山下 惣一（農民作家）
- パネル討論
 - 徳野 貞雄（トクノスクール・農村研究所、熊本大学名誉教授）
 - 宇根 豊（百姓、元農と自然の研究所主宰）
 - 八尋 幸隆（百姓）
- 設立趣意書の承認
- 運営方針、活動内容の決定

「小農学会」設立報告

萬田 正治



本日の設立総会に至る経過を、少し私的なヒストリーも織り交ぜながらお話ししたいと思います。

私は工業地帯の北九州市でサラリーマンの次男坊として育ちました。父は耶馬溪近くの貧しい農家に生まれましたが、跡を継ぐのが嫌で家を飛び出し、大阪に出て、ポイラーマンをしながら独学し、工業系の大学を出て、国鉄マン（電気技師）となりました。結婚して7人の子供をもうけましたが、特にそのうち4人の男の子たちだけは大学まで行かせたいと考え、国鉄の安月給ではやっていけず、4歳半ばで辞めて、国鉄下請けの小さな電気工事関係の会社を立ち上げました。それを見て育ったので、大学に行くなら工学部へ行って親父の後を継ぐと考えていました。しかし、高校生ともなると社会に目覚め、農家の出稼ぎの悲劇や農村の集団就職列車のニュースを見るにつけ、人間の大切な食という命に関わる人たちが、なぜ豊かになれないのか、そして、農家が故郷で家族と一緒に暮らすことのできない現状を見て、何かがおかしいと思うようになりました。大学は工学部志望を止めて農学部へ入学すること

を決意しました。なぜ農家は豊かになれないのか、社会のしくみに問題があるのではないか、その原因を探るために、親の反対を押し切って大学農学部進学を決めたのです。

鹿児島大学に入ってから帰省する度に国の将来について親父との喧嘩が続きました。親父はこれからの日本は第二次産業が主体の工業立国であるといい、私は第一次産業の農業も大切だと反論しました。今にして思えば親子で天下国家を論じていたわけです。

大学に入ってから、専門の畜産学に固執せず、農業経済や経営学を含めて、幅広く勉強しました。また、農業に関わる本や小説も読みました。大牟羅良の岩手の農民を描いた「物言わぬ農民」、小作争議を描いた島木健作の「生活の探求」、出稼ぎの悲劇を描いたドキュメンタリー「村の女は夜眠れない」など、涙して読みました。農村の現場にも出かけ勉強しました。1年生の夏休みには根釧原野の開拓酪農家に泊まりこんでの実習、貧しいがゆえの絶えない夫婦喧嘩を見て胸が痛かったこと、2年生の夏休みには奄美大島の砂糖キビ畑での実習、貧しい我が家を助けるため、夏休み、製糖会社のサトウキビ畑でアルバイトとして働く中学生たち、現金収入のためミカンの木の下でせつと大島紬を織る女の人たち、農業では報われない人々の実態を体ごとと受け止めました。また、在学中、週末には霧島山麓の開拓農家で実習し、山地酪農を通して畜産の真髄を学び、汗を流して農家の実態を体で受け止めようと努力しました。時の農業経済・経営学の著名な先生たちの書物を読みましたが、胸にストンと落ちるものはありませんでした。

その後、東北大学の大学院に進学し、有畜複合経営の論者であった農業経済学の吉田寛一先生の影響を強く受け、日本農業と農村の方向は家族経営主体の有畜複合経営だと考えるようになりました。この私の専門は家畜畜種学であり、このテーマで論文を書き上げて卒業しなければならなかったのですが、吉田先生の指導下で水田と畜産の結合する技術として、コンバイン普及による生ワラサイレージの研究、

あるいは山林と畜産が結合する夏山冬里方式の日本短角牛の研究などに夢中になりました。

その後、縁あって母校の鹿児島大学から声がかかり、九州に帰ってきました。鹿大では有畜複合経営としての山羊の研究やバカスや竹材、残飯など、未利用資源の開発の研究に取り組みました。また、屋久島の猿たちが農作物を荒らすため、島の農家の人たちの立場に立つて猿と喧嘩する研究もしました。

しかしながら、日本農業と農村は衰退の一途をたどるばかりで、憂鬱な日々が続きました。40歳代後半まで、私の人生は暗かったのです。それは人間の命の源である食べ物をつくる農家が幸せにならない世の中は理不尽であり、どこかが間違っていると思いつけてきたからです。それまで私も一所懸命、大学で農業の一研究者として取り組んできましたが、一向に展望は開けませんでした。

私も産業が発展すれば人間は豊かになれると信じてきました。したがって、産業としての農業が発展すれば、農家も農村も豊かになると思いつて研究に一所懸命、励んできました。でも、人は第二次、第三次産業へと流れて都市に集まり、農村は廃れていくばかりでした。

学会に出ても、現場の農家と農村の衰退とは関係なく、研究発表は盛んでした。しかも、遺伝子レベルの研究が華やかでした。この大学と現場の乖離に胸が痛み、暗い人生であったわけです。正直、大学を辞めようと思ったことが何度もありました。この頃、現代の農業と農村を鋭く風刺する山下惣一さんの書物を読むようになり、共感するところ大でした。また、鳥取大学の津野幸人先生の著書、実践的視点を放棄した現代の農学を批判し、人間を中心にすえた農学を鋭く説く「農学思想」、地球を守ったのは小農と説く「小農本論」、山間地農村を守る視点から書かれた「小さい農業」に痛く感銘を受けました。その後に出た守田志郎の「小農はなぜ強い」にも影響を受けました。

私が実際に変わり始めたのは、九州農山漁村文化協会の会員としてやっていく中で、農業にはもう一つの道があるのではないかと気が付

いた時からです。それが自給自足を軸にした生活農業論でした。産業農業に対して暮らしとしての農業の道があることに気付き始めたのです。当時、それを説く熊本大学の社会学の徳野貞雄先生、佐賀大学の農業経済学の陣内義人先生、山口県農業試験場の高橋伯昌さんたちとも熱く語り合ったことを懐かしく思い起こします。

一方では、その頃、古野隆雄さんと出会い、合鴨農法に出会ってからは長年探し求めていた恋人を得たように夢中になり、その研究に没頭しました。

今から20数年前、合鴨農法の国際交流でベトナムに行きました。その訪問団の中に山下惣一さんも加わっていました。毎晩泊まるホテルでお酒を飲み交わしながら、皆で日本の農業のことについて語り合いました。帰国間際の最後のホテルで山下さんが、「また次の社会、農業の方向が見えない。萬田さんはどうなのか」と問いかけてきました。その時は少しおぼろげながら方向は見え始めてはいたのですが、「まだ、私もわからない」と答えました。

その後、生活農業論の視点から農業・農村の主役である兼業農家こそ日本農業と農村の主流と考え、徳野先生と「兼業農家集まれ」という大集会を企てたことがあります。不発に終わっていました。

9年前、私の竹子農塾に来て山下さんに講話してもらいましたが、山下さんは「産業としての農業と、暮らしとしての農業は区別して考えるべき」と述べました。その時、私の考える生活農業の方向と山下さんの考える方向が、なぜか一致してきているように感じとりました。

3年前の2012年に、山下さんは「市民皆農」という本を、自然養鶏提唱者の中島正さんと往復書簡形式で出版しました。それを読んだ時、山下さんは次の方向が見えてきたのだなと思いました。昨年の山下さんの年賀状の添え書きに、「小農学会を起こそう」と書かれました。不発に終わっていた「兼業農家集まれ」のことも思い起こし、山下さんの呼びかけに私の心は再び燃えました。しかし、すでに老いた歳のことも考え、また、入院闘病中の妻のことも考え、迷いに迷いま

した。

そして1年が過ぎ去ろうとする今春3月、熊本大学の徳野先生の退官最終講義に参加しました。一次会の終わった後、出口で偶然に集まった6名ほどのメンバーで、熊本の上通りに繰り出し、居酒屋で二次会となりました。その席上、小農学会のことが話題となりました。なぜ会を立ち上げないのかという問いに、事務局をやる人が見つからないからだと答えたところ、メンバーの中で事務局を引き受けてもよいという人が現れ、場は一気に燃え上がったのです。

帰鹿後、すぐに山下さんとも連絡を取り、4月中頃、唐津会談を開きました。集まったメンバーは山下、佐藤、門田、萬田の4人です。種々議論の末、迷いながらも秋に向けて小農学会(仮称)を立ち上げる方向でまとまりました。

そのための準備世話人会を、7月下旬に福岡県宮若市の湯原(ゆばる)荘で開きました。約10数名の方が集まり、秋11月末に設立総会を立ち上げることが確認され、本日の設立総会となったわけです。

国連は世界の食料危機と環境保全において、家族農業が大きな役割を果たしていることを認め、昨年の2014年を国際家族農業年として定めました。そして、各国にそのための政策を策定するよう求めました。

すなわち、国連でも小農こそが世界の農業の主流であることを認めたいわけです。しかし、我が国の政府はこのことに熱心ではありませんでした。

一方では、TPPによる日本農業の危機が迫ってきました。世界の市場原理・競争の真ただ中に、我が国の農業と農家を丸裸にしようとしているわけです。そのTPPの締結はもう目前に迫ってきています。

私共はこのような今日の情勢もしっかり踏まえ、だからこそ、勇気をもって小農学会を立ち上げたいと思います。



基調講演要旨

山下 惣一



こんにちは、山下でございます。

ここから西へ約40km行きますと佐賀県唐津市、そこからさらに東松浦半島を12km北上した玄界灘に面した北向きの村で、私は百姓をやっております。韓国まで200km、その昔、太閤秀吉が朝鮮出兵の拠点とした名護屋城址までわが家から7km、その先6kmの位置に九州電力の玄海原発4基があります。佐賀県北部のこの一帯は台地の畑作地帯で、昔は麦と甘藷が主産物の貧困地帯であり、出稼ぎ地帯でもありました。現在は

JAからの管内ですが、正組合員6,000名、農産物販売高約300億円のJAの1組合員当たりの耕作面積は水田55a、畑・果樹園が35aの合計90aなのです。販売額の90%は園芸作物と畜産。米、麦、大豆の農産部門は1割弱で、園芸作物の中で販売額が多いのはハウスミカンとイチゴです。わが家は分家で、私で6代目。現在は女房と棚田70a、ミカン50a、野菜畑10aのほか、梅、レモンなど少量多品目の農業を細々とやっております、私がやれなくなれば長男が戻ってくるようになっていきますので、後のことはまったく心配しておりません。そのような百姓だということをご理解ください。

○なぜ小農なのか

さて、「小農」の定義ですが、これは経営規模の大小や投資額の多寡ではなく、目的によって区分します。暮らしを目的として営まれている農業はすべて小農であり、利潤追求を目的とすればこれは大農です。私は、日本は99%小農の国だと考えています。もっと言えば世界の農

業の90%は小農と言っているのです。ところが日本の場合、この小農が政策によって消滅の危機に追い込まれている。これはとんでもない間違いであり、社会全体にとつても不幸なことなので何とかしたい。これが小農学会設立の動機であり、理由であります。

日本列島を考えてみて下さい。およそ7割が山林で、耕地は12.2%しかない。全国津々浦々の農山漁村を支えてきたのは、代々その地に住みついて農を土台として暮らしてきた人たちなのです。そして、これからもそうでなければ結局は国が守れない。私はそう確信しています。その道筋を自分たちで模索して行こうというのが、この会の目的です。

周知の通り政府は「強い農業」「攻めの農政」「農政新時代」などとして農業の構造改革を強引に進めています。TPPを奇貨として戦後70年続いてきた自作農主義を転換して農業を産業化しようというものです。そのために今後10年間で、担い手の農地利用が全農地の8割を占める農業構造の確立を目指し、各県に「農地中間管理機構」を新設し、農業委員の定数を半減し、その分を新たに「農地利用最適化推進委員」にする一方で、耕作意欲のない遊休農地の課税強化が打ち出されているのです。このような方向に私たちの未来があるのでしょうか。答えは「NO!」です。

自分の農業現場に当てはめて具体的に考えてみれば、すぐに分かることです。私が所属するJAの1農家当たりの水田面積が55aだということは先に述べましたが、55aだから棚田が維持できているのです。これを10人分、20人分をまとめて耕作するなど不可能なことで、そもそも農道、水路の維持管理はどうしますか。それは中山間地の特殊な問題だと言われるかもしれませんが、九州の自治体の70%は中山間地に位置しています。全国でも似たようなものでしょう。そうでない方が特殊です。

では、今のままでいいのか。農村の超高齢化、後継者不足を見据えて、できることから農地を集積して大規模化していかないと、それ

こそ農業全体が減じる。そういう反論はあるでしょう。これが現農政推進の大義名分です。では尋ねますが、大規模化すれば残れるのでしょうか。大規模化した法人や集落営農が経営破綻したら、その次の受け皿はどうなるのでしょうか。

○私の大規模農業批判

私はこれまで世界50カ国の農業・農政を見てきました。もとより短期間の旅行者として通過するだけです。どこまで理解できたかは大いに疑問です。それでも骨董品の目利きみたいなものはあります。

(1) 大規模農業があるところには、一方に膨大な土地なし農民がおり、都会にはスラムがある。貧富の差が大きく治安が悪い。(2) 大規模化は単作化である。単作にするから規模拡大しなければならない。逆にいうと単作化しなければ大規模化はできない。機械化が進み人がいらなくなりコミュニティが消滅する。そして、誰もいなくなる。(3) これは農業の工業化システムであり、いったんこのレールに乗ると、路線変更も後戻りもできず、倒れるまで進むしかない。(4) 生殺与奪の権を外部に握られる。機械、資材、飼料、肥料、農薬、為替変動など、個人の努力ではどうにもならないものによって支配される。(5) その結果、利潤追求の大規模農業は経営者も働く者にとっても現代の農奴制となる。勝利者は農場の外にいる。

○農業への企業参入について

私が思うには最大の問題は、企業は寿命が短いということです。耐用年数において農業にはもっとも適さない経営体だと思われまます。

「百年続く企業の条件」(朝日新書2010年)によれば、帝国データバンクが顧客としている国内企業125万社のうち100年以上続いているのは1・6%の2万社。平均年齢40・9歳。全体の80%は創業者の一代企業で消滅している。創業から100年以上を「老舗」と言うが、「老舗」に多い企業は(1)酒造業(2)酒卸小売業(3)呉服



(4) 旅館、ホテル：等となっております。いずれも斜陽産業と見られているものばかりですが、100年以上続いているのはこれらの企業なのです。「老舗」に共通している社は、社訓は◎大きくなるな◎身の丈に合ったやり方◎腹8分目経営◎流行を追うな◎柳に風折れなし◎保証人になるな◎投機相場に手を出すな◎選挙に出るな。

つまり、企業目的が成長拡大ではなく持続なのです。だから、続いてきた。農業も同じです。企業は100年続くと「老舗」ですが、農家の100年はまだ「新家」「分家」と呼ばれます。「儲かる農業」とは儲かる作物を儲かる間だけしかやれない農業のことです。利潤追求を目的とした企業では持続性はありません。破産、倒産で夜逃げする人たちが後に責任を持つでしょうか。百姓は逃げられないから慎重になるのです。某量販店が全国で1,000haの農場を経営して「日本一大きな農家になる」と宣言して話題になりましたが、一代では農家になれませんし、たしかに日本では大規模ですが、日本列島には450万haの農地があるのですから「九牛の一毛」に過ぎません。全国の小農が担っている仕事を、企業が肩代わりすることは不可能だということとは明白です。

○国際家族農業年に背中を押されて

日本では話題にもなりませんでしたが、2014年は国連が定めた「国際家族農業年」でした。報告書の日本語版「家族農業が世界の未来を拓く」(農文協)を読んで私は大きな力を得ました。これまでの私の主張が、決して一人よがりでも的外れでもないことが確認できたからです。

「家族農業」とは「家族の労働を主に用いて所得または現物を稼ぎ出している農業」と定義されています。小農と同義です。これが世界の農家の大部分を占めているのです。平均耕作面積は1ha未満が73%、2ha未満にすると85%にもなるそうです。農産物輸出国の巨大農業が特殊なのです。この報告書の内容をおおまかにまとめてみま

すと、(1) 家族農業は世界の農業の土台であり、90%を占めている。(2) 世界の飢餓を解消するには、これへの支援しかない。(3) 飢餓人口の70%は超零細農民(3) 環境保全、生物多様性にすぐれ、大規模農業よりも土地生産性が高い。(4) 多くの人々にとつての故郷であり、民族文化の伝承者でもある。(5) 農業の専門特化はリスクを高める。

「これら小規模農家が社会的、文化的にも政治経済的にも重要な存在であることが、国家によって承認保証されることが求められる」と、各国政府に要請しています。

とりわけ「農業の専門特化はリスクを高める」という指摘はとても重要だと思えます。経済の相互依存、為替変動、関税引き下げ、気象変動など、グローバル化した今日の国際社会では単作、専作の大規模農業は非常にリスクの高い不安定なものとなっており、先進各国の企業農業の倒産事例が報告されています。大規模農業ほど危ないので、その対策は「多様化」であり、先進諸国の農家の兼業化は「リスク回避の有効な手段」として、むしろ前向きに容認しています。複合経営や兼業、だから強いのです。各国の兼業化はオランダでは男女を問わず80%が農外労働に従事し、農家所得の30~40%を稼いでいる。フランスでもフルタイム農家の50%以上が農業生産以外の労働に従事。アメリカの兼業化率は67%。ロシアでは都市住民の70%が郊外に「ダーチャ」という自給菜園を持ち、ジャガイモの90%を自給している。ちなみに日本の農家の兼業化率72.5%となっています。

私たちは長い間、日本の農業は零細でダメだダメだと言いつつ聞かせられながら、首をすくめて生きてきました。しかし、世界的に見れば決してそんなことはないのです。もっと自信を持ちましょう。専業でも、兼業でも、半農半Xでも、日曜百姓でも、家庭菜園でもいいのです。すべて小農です。小農だからいいのです。強いのです。楽しいのです。豊かなのです。そして、強い農業が生き残るのではなく、生き残った農業が強いのです。みんなでその道を模索し研鑽し実践し普及して新しい時代を創っていきましょう。ありがとうございました。

《パネル討論》



宇根豊（農業・元農と

自然の研究所主宰）：

山下さんが最後に百姓は誰にも雇われていないという話をしましたが、天地に雇われているんではないでしょうか。学会ってなんだったのか。今までの学や学会を敵に回すということ。学校、農政を敵に回す。そこに学会の理由はある。さらに国家とはなにか、を問わなくてはならない。私たちは完全に国民化されすぎている。資本主義化されている。資本主義社会を支えるための国民になっている。

ウリミバエだって、輸出しようとするから根絶しなければならない。村で自給しているうちは、ああいうのは害虫ではない。口蹄疫だって、牛がかわいいから殺したくない、と言えない国になっている。国民全

体が国民化され、均質な国民になっている。わがままが言いにくい。百姓が自立しにくい。国民のために百姓をやっているみたいになっている。

学とはなにか。農業のことは百姓が一番詳しい。学者の出番はない。百年一日のごとく農業で続いているのがいい。これまでは農業を「進歩」させるために、農業を資本主義にうまくさせるのが日本の農学の使命だった。しかし、近代化できない、資本主義化できない世界がどかんとなる。これまでの農学は、おカネになる社会、だけを支えてきたが、おカネにならない世界、資本主義にのらなかった世界が大事なのではないか。



新しい学は、それを評価していきたい。大規模経営だって、土台の部分を「小農」世界が支えているから成り立っているのだ。土台の部分は一緒なんだ。そうでない大農はつぶれていくだろう。大農の形態であっても、政府のいうかたちではないあり方があるのではないか。そうすれば、小農、大農は規模とは関係なくなる。資本主義にのせない農学が必要なのだ。農業の半分は資本主義からはずして、国が支える社会があってもよいのでは。そういうことを考えた学者も少しはいた。徳野先生、萬田先生の力不足だけではない。そういう農学だったのだ。

長崎県諫早干拓で研究されている無人トラクターの運行を考えてみるといい。そこでは百姓仕事を追放されている。百姓に代わって仕事をしていると思われるトラクターは、はたして天地に雇われているだろうか。農政、農学が変わるだけではだめで、百姓も変わらなければならぬ。

八尋幸隆（百姓）：私の爺さんは次男坊で、戦後、その爺さんの代から、少しずつ節約したお金で農地を広めてきた。私は小さい頃から爺さんの背中を追いつながら育ってきた。爺さんが新規就農のようなもので



す。私で三代目です。子供の頃は家族みんなで仕事をして、子供にも役割があり、それを果たすと爺さんがほめてくれるのが、子どもなりに嬉しかった。農作業は手仕事が多かった。家族が一体となって働くのが楽しかった。それが中学、高校に進むにつれて楽しさがなくなってきた。機械化が進み、楽になったはずなのに。なんでこうなるのかということが知りたくて、大学の農学部に進学した。

大学に進学してみると、大学で学ぶ農業問題と私の抱えている農業問題がずれているなと感じて、大学に行かなくなり、とうとう選択した教室から呼び出しをくれました。その時すでに百姓を始めておりましたので、担当の先生に了解をいただいて、百姓をしながら時々、大学に通うことにしました。どうしたら昔のような楽しい農業ができるのか、ということを実践しながら探ろうとしたのです。大学での講義とは別に自分でいろいろと調べていく中で、国が進める大規模近代化の方向ではなく、日本の風土を生かしたきめの細かい農業をやれば、小さい農業でもやれるのではないかと思ひ至りました。実際にやっている人が各地にいたからです。そういう百姓を訪ね回りました。当時、問題になっていた公害問題、食品公害、農業の分野では農薬の多投の問題も、小さい農業であれば克服できると考えて、いわゆる「有機農業」を目指したのです。

よく考えたら、百姓は上からの指導で思いこまされてきたことが、余りにも多かったのではないかと思うのです。宇根さんと一緒にやってきた「減農薬運動」でそのことを痛感しました。稲作については主食ですから、もう十分に研究し尽くされていて、新しいものは出てこないのではないかと思つていたけど、減農薬稲作の活動をやっていく中でそうではないことがはつきりしてきた。宇根さんのように少し外

れた人がいたことで、自分のフィルターを通して、もう一度考える大切さを学びました。それはもちろん稲作についてだけでなく、いろいろな分野でもそう言えるのではないかと思つています。

私は今、現役の農業委員をやっています。来年度(28年度)から農業委員会制度が変わり、農地の8割を担い手に集約するために働くこととなります。ますます小さな農業が軽視されることになることでしょう。これまでは農業委員会は「公選制」で農地転用のことだけでなく、農政に対して建議をすることも仕事でした。農業委員だけで集まってみると、農政の方向とは反対の話がいっぱい出てきていきました。が大勢に流されてなす術もないというのが実態です。



徳野貞雄(トクノスクール・農村研究所、熊本大学名誉教授：僕たちは皆60歳過ぎになり、歳をとった感がある。この小農学会は、そのため年寄りの冷や水という感もあつたが、やらざるを得ない状況になっている。1960年の60歳代は5%しかいなくて、ほとんど腰が曲がっていた。しかし、いまこの会場で60歳以上が沢山いるが、腰は曲がっていない。

農業農村は高齢化するというが、サラリーマンと経営者は高齢化しないのか？ する。昔とまったく異なっているのだ。今、農業をしている人の多くは元サラリーマンだったりする。最近、農林水産副大臣に言ったが、小農は力ネを農業につき込んでいいる。カネを稼ぐことより、つぎ込むことの方が大切だ。家族では子どもは力ネがかかる。カネをつぎ込む先は大切だ。農業は力ネを稼ぐのは難しい。しかし、多くは赤字になるが、そこでは家族は生きていいる、子どもが生まれていいる。都会の人が体験農園などで、一個3,000円のトマトを作っている。そして、都会では人は作れない。いままでどう稼ぐかだったが、どんな分野にどう力ネをつぎ込むべきなのか、を考えるべきだ。

農村の問題を研究していると、もう都会は持たないのではないかと考えている。モデルを作ってそれを拡げていくことで、都会は発展してきたということになっている。しかし、都会では人間は作れなくなってきた。増田レポートで言っていたのは、本心は、都会はカネは作られても、子どもは作れませんでした、と言っているのだ。それは、子どもは人間だったからだ、ということになる。それを別の言い方で言っているだけだ。だったら、どうするのか？これまでやってきた子どもを都会に集めることの国家的リスクを考えているのだと思う。そこで、自分は最近「大都市脱走計画」というのを進めようとしている。

八尋：消費者は変われるのか、変わらないのか。若いころから、直接提携や産直をやってきました。百姓の私に合わせて、消費者ニーズに応えない有機農業をやってきましたのですが、いつのまにか消費者をヨイシヨする、消費者のニーズに応えるようになってきた。それをやってしまうと、百姓に未来はないように思います。提携を始めた頃は専業主婦が一般的でしたが、段々と消費者の奥さんたちも家にいなくなつて、連携活動も下火になってきた。その中で、きちんと農のメッセージを伝えるということが難しくなってきた。しかし、それをやらないと直接提携の意味がない。そこで、消費者をおもてなしするのではなく、一緒になって農業し、料理して食べましよう、という「むすび庵で農と旬を語ろう会」という取り組みを続けてきた。イベント的なものではなく、日常的に農と触れ合ってもらおうという試みです。子育て中の若い女性の方は、かなり真剣に危機感を持つてうちに来てくれます。そういう人たちが確実に増えてきているという実感はある。

宇根：経済成長とは別の視点が農業にあるのではないか。

徳野：昭和63年生まれば230万人いる。今の20歳は120万人。明治時代は全人口が3,300万人だった。今は無茶苦茶、人口が多い状態だ。日本の歴史の中では異常な時代の、異常な世代だ。人口が増えることは幸福を意味しない。

宇根：大体、若者が半分になり、国民が半分になるのだから、そんなに

カネを稼ぐ必要はないのではないか。

萬田正治：唐津会議で小農の話をした時に、山下氏から「小農学会」にして欲しいという話があった。戦前の農業は地主と小作人の問題だった。農民は組合を作って小作人を守るべきだ、とか言われてきた。戦後は農地解放で農家は小さくても自作農になった。その後、農業の企業化が言われてきた。最近では小農を再評価しようという動きができていく。農業は今、全体的に行き詰まっている。その中で新たな生き方として、都市生活者の中で農業を捉えていく必要がある。これは新しい小農だ。そのため、これからは従来の小農ではなくて、都会人も含めた新しい小農も含むべきだと思う。

徳野：農業は産業ではない（もしくは、産業としての農業と、生活としての農業は別）という議論もある。少なくとも農業はカネより以前からあったものだ。聖徳太子の時代は、まだ世の中にカネはなかった。しかし、人々の生活は成り立っていた。

宇根：「儲け」が大切だ、経営感覚が大事だ、と言われ始めたのは、最近のこと。「米作日本一」という表彰事業があった。各地で予選会があつて、最後にはその年の全国一がきまる。日本一になった田んぼの畦には、畔草が生えないくらい人が視察にきた。この技術にはコスト意識などの経営感覚はなかった。今よりはまだよかつたのかな。百姓は、国家が定めた指標に対して、血眼になってやるようになっていく。国家もうまいですよね。この時代に「多収」は、説得力があつた。まだ天地自然と人がつながっていた。もともとはなかった経営感覚、費用対効果などという尺度が、どんどん植え付けられようとしている。そうじゃない価値を表現してぶつけられない限りは、負けていくのではないか。経済成長を必要としない世界が農業にはある。それを理論武装していく必要がある。

萬田：単なる会ではなく学会にしたのは、小農の理論化を図っていく必要があるから名称を学会にこだわることにした。学者が嫌いで百姓になったが、今一度、学者に戻つて小農の理論化を追求してみること

小農学会設立総会



にした。小農とは何か、議論しながら皆で小農概念をつくっていけばよいのではないか。
宇根：「害虫」という言葉は、江戸時代はほとんど使われていない。江戸時代の農書には、害虫ということは出てこない。全部「虫」です。

明治以降、害虫という言葉で農学が村に持ち込んで、百姓の精神世界が見えなくなつたのではないか。私の友人が言ったことがある。「自然が大好きだけど、自然といった瞬間に、人間は自然の外に出てしまふことが悲しい」と。
百姓の感性では、自然の一員として生きていくのがいいと感じるが、そういう百姓を評価するのではなく、百姓を自然の外において評価しようとするのが

現代社会です。二宮尊徳の本を読んでいたら、面白いんですよ。「音もなく香もなく常に天地は書かざる経を繰り返しつつ」「音もなく香もなく常に天地は書かざる経を繰り返しつつ」とある。

百姓は天地自然としつかり付き合ってきたのに、それを徹底的に無視して、馬鹿にしたような農業政策が打たれてきた。小農学会でやるべきことは、農の精神性に対して本気で取り組まなければならぬ。農学では扱われてこなかったからだ。それを、資本主義にぶつけていくことが大切だ。

徳野：人間の精神性とか心の問題と、農業をもっと近づけて考える必要がある。下関市立大の学生で、粳・玄米・白米の違いが分からない者が9割だった。私は、この違いが分からない者を「ジャパニーズ」と言い、違いが分かる者を「日本人」と言う、と主張している。

八尋：若い人たちに農業回帰が進んできている、というのが私の実感。保育園に野菜を届けているが、そのお母さんたちがなぜその保育園に子どもを預けるのかと聞いてみると、「自分の家庭でちゃんとした食事をさせてあげられていないから、せめて一食だけでもちゃんとしたものを食べさせたい」との思いで、少しでもいい食事を出してくれる保育園を選んでいくケースも多いと聞く。かなりきつい状況の中でお母さんたちも必死になって働いている。子どもたちにちゃんとしたものを食べさせたい気持ちはあるけれど、実際はかなり難しいのが現状のようです。そこで、きちんとした食事を食べさせてくれる保育園に預ける。その保育園で出される献立は、年寄りが好みそうな地味なものも多いのですが、子どもたちは意外にも喜んで食べるということです。カラフルな料理を好むと思っていたので、こんなものを子どもが食べるのですか、と尋ねる親もいるようですが、子どもは喜んで食べている。子どもの感性というのはすごいなと思いました。実際の食生活は貧しいけれども、これではいけないだと思っっている若い夫婦がいるということは、まだまだ救いがあります。

〈質疑応答〉

沢畑（水俣）：小農学会の主旨説明がありました。バリバリやっている人への批判が多いのですが、仲良くすることはできないのでしょうか。土地持ちは不動産をやりたいと思う人が多いと思うのですが、八尋さんは絶滅危惧種のように守っている。その気持ちを抑えられるのはなぜですか。

山下惣一：兼業農家が専業農家を苦しめている。TPPをなくしたら、ダメな農家を残す、と言う人もいる。企業的な人々であり、そういう人たちは手は組めない。ムラはうまくやっていくことが基本です。大農と小農の関係。大農も小農の土台。きちんと、小農とはなにかを、豊かに表現することがあれば、対立することなく（対立する部分があったとしても）、共感する部分はある。

八尋：市街化区域の農業は今や絶滅危惧種と言われていますが、危惧されていけばまだいいのですが、絶滅期待種ではないかと心配しています。はたから見ると、あんなよかところで優雅に百姓しよる、と思われているでしょうが、実際は固定資産税の軽減措置が外されてほぼ宅地並みの水準となっており、とても「左うちわ」どころではない。農業を続けるためには農地を処分しなければ税金が払えない、という矛盾を抱えてやっているわけです。農業を止めたくて止めた人は少ない。三大都市圏などは都市の中の緑の空間を大切にしようということ。「生産緑地」などの制度が適用されて、固定資産税も普通の農地並みに軽減されています。中途半端に都市化すると、何の配慮もなく、目も当てられないくらいに惨めなものです。今は「都市農業振興法」に期待しているところです。

萬田：戦後、農業基本法が制定されて農業政策は、小農を否定し専業化、規模拡大、企業化という流れになった。その中で小農はしたたかに生き抜いてきたのではないか。故に小農と規模拡大・企業農家が仲が悪いということではない。両者を対立的にとらえる必要はない。

石山（石川県）：農業の高齢化ということですが、農業センサスでは若

い人の就農者が少ない。若い人の農業教育はいかがでしょうか。キリスト教の私立高校・三重県愛農高校は生徒は少ないが、視察に行つたときに農業を大事にしている、全寮制で先生と生徒が寝食をともにして農業をやっている。孫に農業大学に行けと言い、孫は私立の農業大学に行きました。しかし、高校の間は朝早く起きて農業を手伝っていた孫が、大学に入ると生活が乱れてしまった。農業の基本は朝早く起きることがある。農業は高校の間に教えておくべきではないか。西本願寺派の龍谷大学は、農業に関する学部をつくと聞いています。理論武装ということであれば、なるほどと思いました。

山下：こういう時代になって農業を続けていくのに必要なのは、思想、哲学と言っているかもしれない。学校では経営学、技術を教えている。朝起きるのは、親が教えるべきでは…。

沢畑：ウチの村でも大学生が来て実習をする。大学の先生もいいところですよ、と言う。ムラの人々は、当たり前前のムラだと言う。人に伝える必要がなかったことを、当たり前前としてきたことを、あえて表現しなければいけない。そこまでしないと近代化に対抗できない。大学の先生方がやるのではなく、イシヤマさん自身がやってほしい。

西川（龍谷大学）：生きる上で思想や哲学が大事。自然と言葉にした瞬間、人間が外に置かれてしまう。浄土真宗の教えの中でやって行く。循環のなかで捉えていく。文化系を中心に、小農学会と通じる部分があると思います。有機農業学会で中島先生が農業の本質を言われているのですが…。

萬田：中島紀一先生（茨城大学名誉教授）とは連絡を取っている。有機農業学会との違いは、百姓の学会というところです。学会が精神性、哲学、思想を持つところ。百姓は、思想を持つ。

岡田（門司）：37歳独身。やぎを5頭、ミツバチ、畑作1・5反。今、フェイスブックで発信している。忙しくて、やりたいのだけできない。農業は畑でやらなくても、ペランダ農業もできる。そういう人たちに

も門戸を開くような、間口を広げることはどうでしょうか。

八尋：前は、プロの百姓というプライドがあった。チマチマしたことは、百姓がすることではないとも思っていました。今は、違います。小農の哲学をもってすれば、プロの百姓も小さな趣味人も同じ。どんな間口を広げられますか。

横林（諫早）：観光農園をやっている。小農学会という名称は、家族農業をしている人から見ると、自分たちは違う、というように思われるのでは…。概念では当てはまる人が、敬遠するのではないのでしょうか。

徳野：名前は難しい。当面はこれでいきたい。

大熊（大分）：これまで大きな農業を作ろうとしてきたが、もうそんなことはしたくないと思っている。朝日新聞などは小農がいるから、大きな農家が育たなかったと言っている。しかし、それは違う。都会から農業に入る人たちは、農業を喜んでいる。市役所の公務員などで農業をやりたい人がいれば、退職金を上積みして早く退職させ、農業に引き込むというのは良い手ではないかと思う。

徳野：昭和50年代、山口大学の山本陽三先生は「小農は小農を欲するが故に、小農を選んだのだ」と言っていた。公務員だといっても大都市の市役所のサラリーマンと町・村役場の職員さんでは違う。公務員だから農に向くというわけでもない。

小田（山口）：山口では、有機農業が遅れている。有機農業の仲間として誘いきっていない。有機農業の推進教育を市町村で持っているところがない。農業の主人公が小農だったら、有機農業が圧倒的に少数で悩んでいる地域があるということにも留意し、今後のご指導の中で我々の力になっていただけるとお願いしたい。

外前田（宮崎）：山下さんの話を聞いて、大変な時代になるなと思いましたが。宇根さんのもう一回、自分たちで新しい価値観をもち、それを言語化していくことが益々大事になることを痛感した。農地を集積し、企業農業という方向が進むのだろう。グロバリゼーションの最たるものであるTPPは、作れるのに作らせない、買わせる、というこ

とになる。多国籍企業の一人勝ちという構造をつくっていく。TPP後の農村の姿がどうなっていくのか。対抗していく措置はあるのか。

山下：TPPになっても、残れる地域社会があるために小農学会をつくったのです。

宇根：農業を資本主義から外すことを、国家に任せるのではなく、百姓がやるということです。



《小農学会のすすめ》

小農学会設立趣意書

20世紀は二つの世界大戦や内紛など、繰り返される戦争と、一方では人による地球環境を破壊していく世紀であった。21世紀こそ平穏でありたいと、多くの人々は願ったはずであるが、21世紀を迎えても対テロ戦争など新たな戦争が繰り返され、人の心も乱れ、地球環境も益々悪化し、世界は混迷の一途をたどっている。我が国もまた戦争の出来る国へと変容した。

戦後の我が国は豊かな生活を求めて、経済大国として復興したが、一次産業（農林水産業）から二次（工業）・三次産業（サービス業）へ、農村から都市へと人は大移動し、過疎の村と過密の都市という地域に二極分解した。

古来より光注ぐ太陽のお蔭で、人は大地を耕し、生き物の命を育み、その命をいただいて生きてきた。今や大型スーパーに並ぶ豊富な食材を、多くの都市生活者は第二次、三次産業で得たお金で買い、生き物の命を育み命をいただく意識は薄れている。

既成の情報や知識が役立たなくなっている今日、このような状況を打開するには、何を価値の基準とし、何を頼りとして現在を生きるのか。その答えを出していかなければならない。これまでの価値観から抜け出し、斬新な発想に立って、自らの生き方と、我が国の進路、とりわけ農業・農村社会の方向性を探求していく必要がある。それには既成の組織やマスメディアの情報のみ依存せず、自らの意志と頭で学習を積み重ね、研鑽する努力が今求められている。

貨幣経済が発達し、人は都市に集中し、村の小学校が廃校となり、集落が消滅し農村が寂れていく。にもかかわらず相変わらず農政の流れは、営農種目の単純化・大規模化・企業化の道を推し進めようとする。それに抗してもう一つの農業の道、複合化・小規模・家族経営・兼業・農的暮らしなど、小農の道が厳然としてある。なお小農とは既存の農家のみならず、農に関わる都市生活者も含まれた新しい概念と考えたい。このいずれが農村社会の崩壊を押しとどめることができるのであろうか。これを明確にしなければならぬ。

このため、小農の道をめざす勢力がもっと結集し、研鑽し、社会的発言力を高める必要があるのではないか。故に小農学会の設立を提案する。

〈小農とは〉

日本で小農を最初に取り上げた人は、実は思いも寄らない民俗学者の柳田国男のようです。1910年(明治43)に「時代と農政」という書物の中で、小地主自作農、即ちこれを地持小農といい、資力のない小農は外国との競争の中では最も敗北しやすき者と言明しています。そして、小農を取り続ける唯一の道は、小農の産業組合化をはかるべきと提唱しています。

4年後の1914年(大正3)に東大で開催された社会政策学会第8回大会の中で、大農か小農かが大論争となり、東大農学部教授の横井時敬が小農を援護する立場で論陣を張りました。特に横井博士は「小作即ち水飲み百姓」をも小農の一部としてとらえ、これを保護の対象とすべきと主張しました。

戦後、昭和22年、GHQの指揮下で農地改革が断行され、小作農が廃止され、日本の農家は小地主自作農となりました。そして、昭和36年に制定された農業基本法により、小農から大農へ、大規模化と専業、あるいは企業化の政策が明確となりました。農業経済経営学者の間では、小農とは「比較的小さい面積で家族労働を主体とする農業」として定義づけ、家族経営の小農と企業化をめぐる論争が繰り返されました。その中で東北大学の吉田寛一先生は有畜複合家族経営を提唱し、論陣を張った研究者です。まさに小農を支持した研究者です。私は当時、東北大学大学院に在学し、吉田寛一先生の影響を強く受けて育ちました。その後、二十世紀後半になると、鳥取大学の津野幸人先生が、地球環境を守る視点からの「小農本論」、山間地農村を守る視点からの「小さい農業」を出版しました。また、その後、守田志郎の「小農はなぜ強いのか」、そして、最近に至っては、山下惣一の「市民皆農」、「小農救国論」が矢継ぎ早に出版され、小農の価値を再評価する論陣が張られてきました。

さて、高度経済成長を遂げた現代の日本において、小農とは何か、改めて新しい位置づけと定義が必要と考えています。それは小農をこれ

までの既存の小農を基軸としながら、これのみに限定せず、農的暮らし、田舎暮らし、菜園家族、定年帰農、市民農園、半農半Xなどで取り組む都市生活者も含めた階層こそが、新しい小農と定義づけたいと思います。

2015年11月29日 萬田 正治

〈〈「小農学会」申し合わせ事項〉〉

○名称 小農学会とする

○会員 趣旨に賛同する者

○運営体制

代表 萬田正治 山下惣一

副代表 徳野貞雄 八尋幸隆

世話人 田中欽二 古野隆雄 宇根 豊 前田 穰

松熊秀二 梅村幸平 筋田晃司 外前田 孝

深野修司 佐藤 弘

監事 世話人の中から互選

顧問 竹熊宜孝 津野幸人

事務局 門田信一

○財源 会費 年3,000円

寄付

○活動 総会(年1回)

シンポジウム、現地研修会(年1回)

会誌発行(年1回)

小農学会賞授与

『小農学会に期待する』

資本主義が終わった後の農のあり方を考える

宇根 豊 (百姓・福岡県糸島市)

山下惣一さんから「大日本小農学会をつくるけん」と言われて、笑ってしまった。何よりも「大と小」のとりあわせがいい。次にもう死語となった「大日本」を採用するところが、「国益やGDP」を言い立ててやまない国家に対する強烈な逆説であって、インパクトが大きい。そして、何よりも「小農」という行政用語ではない用語を打ち出したことが、新鮮である。

(ちなみに日本での「小農」の初出は、1871年(明治4年)に出版された中村正直訳『西国立志編』のなかの「ニュートンは小農の子にして」というものだそうだ。この本はサミュエル・スマイルの『自助論』の訳で、序文の「天は自ら助くる者を助く」という文句は、有名である。)

したがって、「小農」の本格的な定義も、農水省が口出すことではなく、ここでやればいい。さて、問題は「学会」である。なぜ「学会」を名乗るのか。私は、ここが一番いいと感じる。学会などくだらないと言ってきたが、百姓を指導する学会はごまんとあるが、「小農学会」にはそうした日本農学を突き放す姿勢が感じられる。百姓の「学」もあるのだ。(文中の敬称は省く)

1、「学会」を名乗る意義

かつて「百姓に学問はいらない」と言われて、反発する百姓も少なくなかった。いま、こう言い換えてみるとその意味は劇的に転換する。「百姓に、農を資本主義に合わせることを(当の学者が気づいているかどうかを問わず)すすめてしまおう農学はいらない」と。

かつての百姓がどこまで自覚していたかは知らないが、たしかに「百姓にいらぬ学問」はあったのであり、その「いらぬ学」は現在も健

在であるばかりでなく、日本の農政や農業技術を支え続けているのである。この主流の日本農学こそが、明治期以来、日本という国民国家が百姓を日本「国民」にするために、そして、百姓の農を「日本農業」にするために、創学し育成してきたものである。

戦前から戦後まで、日本の農学と農政をリードした東畑精一は、まちがいに誠実で見識も深い学者であったが、じつにこの間の事情をまだ三十歳代の東京大学の教授時代にこう指摘してくれている。「農業が変化しないなら、農業のことは百姓がいちばんくわしい。学者の出番はない。しかし、世の中は資本主義が発達し、他産業は飛躍的に進歩していく。このままでは従来のような百年一日のありかたを続けている百姓では、時代に遅れてしまう。日本農学の使命は、この国の農業を資本主義の発達に乗り遅れないようにすることだ」と。これは現代でも通用する、日本農学の本質を見事に言い当てている。

かつては資本主義に対抗するもうひとつの近代化思想として「社会主義」があつたので、東畑の言い分は、農学の一面しかみていないと思われていたが、そうではない。「資本主義」の部分を「近代化」あるいは「生産性向上」「低コスト化」と言い換えると、社会主義陣営の思想も同根、だつたとわかるだろう。

問題は、東畑以来の日本農学が顧みなかった「百年一日のように変わらないもの」を、顧みる学がそろそろ育たないといけないのではないかということだ。こうした学、つまり「反・日本農学」こそが、小農学の土台に座っていないのではないだろうか。

「百姓に学問はいらない」を、今日的に言い換えるなら、「農を、近代化に(これ以上の資本主義に)合わせさせようとする学問は、もういらない」ということになる。したがって、現在進行中の百姓の「高学歴化」はゆゆしきことであって、歓迎することではない。だからこそ、「学校」の中にも、日本農学ばかりでなく、「反農学」「小農学」「百姓学」などが、入り込むべきではないだろうか。

これまで「学」は、社会運動から距離を置いてきた。それは、学のある方を社会から問われることを避けてきたからにちがいない。しか

し、現在ではかつて批判されていた「産学共同」が堂々と推進されているし、「地域に根ざした学問」などが推奨されている。これは歓迎されることだろうか。ある意味では現代の「学」もまた、社会運動化しているかのように感じている。ほんとうに十分な反省をしたのだろうか、と疑問に感じる。

でも、「彼ら・彼女ら」のことは、二の次でいい。大切なのは、「私たち」の方だ。小農学会と「学」を名乗るのは、これまでの「運動」にもまた批判の目を向けるためでもあるだろう。TPP反対運動をみていると、「関税で守られた」国内では、さらに産地間競争を激化させ（つまりさらに資本主義の発達に寄与して）、農産物の輸出戦略を税金までつぎ込んで推進しているし、反近代化、反資本主義の思想など、どこにも見当たらないようにみえる。

いやそうではない、それは隠れているだけで、思想化され、表現されていないからだと考える人間たちもいて、自分の生き方で示してきた百姓も少なくないのだ。ここから、この「小農学会」という「新しい学」という名前の「新しい運動」は始まるのだろう、と私は思う。

(※東畑に代表される近代化思想(資本主義)に真摯に対抗した橘孝三郎、権藤成卿などの農本主義者の哀しいまでの人生については、拙著『愛国心と愛郷心』を読んでほしい。)

2、『小農救国論』を読む

ここで山下惣一の『小農救国論』(2014年10月・創森社)を読んでもみよう。いつものように「内からのまなざし」が土台にあって、「外からのまなざし」と見事に対峙している。いわゆる「学」とは、あきれるほどに「外からのまなざし」で貫かれている。科学や統計数値は、その代表だろう。安倍首相に、「GDPを600兆円にする」と言われても、内からのまなざし、つまり人間の実感や、村の中からの観察では、理解不能である。

しかし、この資本主義を推進するために考案された経済指標を、山下はこう使う。「1964年はGDP 30兆円である。私の農業簿記に

よれば、この年わが家の農産物の総販売額が40万円だ。それで家族七人が暮らしていた。貧しいとは思わなかった。それどころか、いまから考えてみるとあのころが一番楽しく幸せだった。」こうして、内からのまなざしで撃つのである。

この本は反資本主義の本である。結論は最初の一行に書いてある。「経済成長に農業はついていけない。これは真実である。理由は簡単だ。自然を相手にしているからである。」そして対案は、「自らを養うというこの自給こそが、農家だけの特権であり、カジノ化したマネー経済の嵐に飲み込まれない農家の暮らしの確かさであり、強さなのだ。いまや農業が農家を守っているのではなく、農家が農業を守っているのだ。」

外からのまなざしは、内からのまなざしできびしく裁断されている。案外、山下は外からのまなざしを毛嫌いしてはいない。たとえば「小規模農家をたくさん残している政策の方が社会コストは安くつく」というフランス人の言葉を紹介するところを見ると、外からのまなざしへの期待もにじんでいるのだが、しよせん農業経済学の方が、後れをとっている。

それにしても、私はこの本のタイトルに疑問を感じたのだ。天下国家からの見方を一貫して否定し、「日本農業などはどこにもない。あるのはわが村の農業だ」と言ってきた山下が「救国」とは、いったいどうしたことだ、思ったのだ。



「敗戦のとき私は九歳。私は（この年に）この国は1回滅びて、それを救ったのが農業と農山村だったということは、忘れないほうがいいのではないかと思います。（中略）農山村を滅ぼすことは、帰る場所を失うことだと思っただけでも、そういうことは誰も考えません。誰も考えないなら、自分だけでも守ろうと思っただけです。」

山下の「国家観（ナショナルリズム）」はパトリオティズム（愛郷心）の延長にあり、陸続きなのだが、為政者の方はそうは考えない。パトリオ（在所）は国家の一部に過ぎないのだ。だから「忘れる」ほうが都合がいいのである。百姓の愛郷心は、近代化社会では、本質的に愛国心（国益を最重要視する思想）と一貫して、対立するのである。この本はこの緊張感をあおり、村の百姓のパトリオティズムで、ナショナルリズムを乗り越えようとするから「救国」なのである。

しかし、それはやはり哀しい。「自分だけでも守ろう」とするしかないからだ。山下の「救国」ナショナルリズムは、それでいいんだと、断言する気概に満ちているから、嬉しくもあるが、哀しい。現代の資本主義社会とはそういうものなのだ。

3、国民国家と村の百姓の関係

「丹精して育てた農産物を廃棄しなければならず、生産者は精神的にも経営的にもつらい。口蹄疫に匹敵する大問題だ。」「口蹄疫で殺処分された家畜の補償は1頭ごとに算定した。柑橘類でも対応を求める声が強い。」（2015年11月15日付け日本農業新聞）

奄美大島への蜜柑小実蠅の再侵入を伝える新聞記事だが、ここに国家と百姓の基本的なすれ違いを見る視点は無い。小山重郎の『昆虫と害虫』（2013年・築地書館）は、こうした事態を予見している。蜜柑小実蠅は「雄除去法」で根絶されたが、よく似た瓜実蠅は放射線による「不妊虫放飼法」で根絶された有名な業績である。小山は沖縄県における瓜実蠅根絶の立役者だが、沖縄では根絶後も「毎週」7000万頭の不妊虫を放飼し続けなければならないことに疑問を呈している。（費用は毎年1億円を越えるそうだ。）

これは「国家プロジェクト」だからできることである。つまり国土である南西諸島から本土へ蜜柑や苦瓜やマンゴーなどが移出できるようにするためである。しかし、小山は驚くような事実を報告している。南米や東南アジアの農村を訪ねてみると、実蠅はたいした害虫ではなく、袋かけなどの伝統的な防除法で防げるのだそうだ。それなのに多くの国家が「根絶」を図ろうとするのは、輸出（あるいは移出）するためだといっているのである。

自給の延長であれば、農業技術に国家プロジェクトが入り込む余地はない。農業技術が国家の手によって牛耳られることはない。しかし、いったん国家技術を受け入れてしまうと、ナショナルリズムが優先するようになる。当然ながら蜜柑は「廃棄」を命令されることになる。小山はこの本の結論として、「害虫は社会（国家）によって、つくられる。害虫を害虫でないようにするためには、防除の前に、社会をつくりかえなければならぬ」と言っている。こういう農学者もいるのである。

同じことを口蹄疫で指摘していたのは、萬田正治だけであつた。（2010年8月28日朝日新聞「私の視点」萬田は、そもそも「清浄国」「非清浄国」に分類して、非清浄国はこれを理由に貿易相手国から家畜や畜産物の禁輸措置を受けることが、全頭殺処分の原因だと指摘していた。萬田は口蹄疫は致死率の低い病気なのだから、全頭殺処分は無菌化せずに、発病しなかった抵抗力のある牛を残すべきだった、ウイルスと共存する社会を目指すべきだ、と言っていたのである。）

どうして日本国では「ナショナルリズムよりも牛への愛情が勝る」と、百姓は言えないのだろうか。そういう政治と農学はこれからも不在のままなのだろうか。

4、「小農」の意味

山下惣一は『小農救国論』で、「小農」を「暮らしを目的として営む農業」と定義している。そして、「規模は大きくても小さくても、目的は暮らししていくということです。家族農業です。逆にどんなに規模が

小さくても、利潤追求を目的としたものは大農です。」と言っている。

また、別のところで、「家族農業が儲からない根本的な原因は、利潤追求を目的としていないからである。そもそも農業に儲けはない。私たちが農産物と引き換えに得ているのは「対価」である。これは「儲け」ではない。」と言っている。

しかし、農業に「経営」という考えを持ち込み、「利潤」という概念すら植え付けてきたのは、農政であり、農学であった。次元が異なるように見えるが、百姓に「害虫」という言葉を教え、「防除」という概念を身につけさせたのも、農政であり、農学であった。こうした近代的な言葉や考え方は、そのほとんどが国民国家によって、日本農学を後ろ盾にして、推進されてきたことは、あまり意識されることはない。なぜならこれらは社会の「進歩」だと、農業をよくすることだと考えられてきたからだ。

これに対して、山下は「これまで、「これで良いのか」とまわりのケツをたたき、本人も自分をムチ打ってやってきたけども、この路線ではダメではないかと思うのです。逆に「これで悪いのか」と考えようではないか。」と、進歩やこれ以上の資本主義化、近代化を拒否しようと呼びかけている。

したがって、「地域再生」と言われると、「またこの延長線上でやるのか」という感じがあります。もっと正直に言えば「もうやらなくてもいいのではないの」と私は思っています。」となる。まったく「地域再生」はいつも外から持ち込まれるのだ。

そこで、私(宇根)の「小農」の定義である。「小農とは、時代の流れ(経済成長とか資本主義とか、さらなる進歩発展などというウルトラ近代化をすすめる思想)に背を向けて、そういうものから農の土台にある大切なもの(天地有情の共同体のなかで暮らしていく喜びなど)をしつかり抱きしめて生きる生き方である」ということになる。

山下が言うように、「小農」であることの価値を意識していることが重要であって、規模の問題ではなく、まして経営形態の問題ではない。思想の区分なのである。

百姓が国民の半数を占めていた昭和初期にあっても、農本主義者は少数派であった。それは当然だったろう。「農は、資本主義に合わない」と主張していたのだから。現代の農本主義者の集団であるかのような「小農学会」は、当然ながら、さらに少数派であろう。それで何が悪い。

5、二つの見方

「百姓には学問はいらない」と言うときには、じつは二つの見方が対比されているのである。単純化して言うと、「百姓の内側からの見方」と「村の外から、百姓の外から、人間の外からの見方」が意識されている。このうち、百姓が違和感を抱いたのは、「人間の外からの見方」であった。

たとえばこういうことだ。「仕事がかどる」と言えば、人間の実感の表現であるし、百姓なら自分と相手(作物や田畑や自然)との関係がじつにうまくいった結果であろう。しかし、「労働生産性」という尺度を持ち出されると、なんとなく似ているような気がするが、かなり違う。なぜなら、そこには百姓の精神性が見当たらない。「生産性」という考え方(価値観)を提案する側(学者や学を後ろ盾にする指導者など)は、この尺度で百姓仕事の核心部分を見事に分析できると信じ込んでしまっていて、これから漏れる世界に目が届かないし、そのことを自覚することもない。

このくいちがいが、百姓の仕事や暮らしと、農政や農学のあらゆる局面で、あらゆる部分で、あらゆる時に存在する。これをいちいち数え上げて表現するだけで、立派な学になると思われるぐらいだ。

外からの見方は、学の後ろ盾がある。「科学」を例にあげると、その違いはさらに際立つだろう。「ヒノヒカリはウンカに強い」と言うよりも、「ヒノヒカリはウンカから卵を産みつけられた細胞を、稲自体が殺して、ウンカのふ化を妨げる遺伝子を持っているからです」と言う方が、説得力はあるようにみえる。

外からの見方は、もともと説明するための動機があるから、表現が

鍛われていて、分量が豊富である。一方の内からの見方は、自分が自分の中に抱きしめておれば済むようなものだから、他人に説明する習慣があまりなく、表現されずに眠っているものがほとんどである。たとえば「盆が近づいてくると、この精霊とんぼは急に増えて来て、村中を飛び交うようになるな」と、思うだけで人に語ることはなかった。

近代以降（明治以降の「学」が広がってくると）これまでの内からの見方は、学から追放されていく。たしかに百姓の経験を理論化しようとする動きも日本農学の黎明期にはあったのだが、やがてそういう手法は見捨てられていく。百姓だって、公の場では、自分の感じや考え方を外からの見方で語るのが習慣になってしまった。

現代においては、内からと外からの見方の衝突の場面はさまざまに生じているのだが、それを表現することは少なくなってしまった。その中であって、山下惣一は一貫して、内からの見方に依拠しながらも、外からの見方に対抗しようとして来た希有の人間である。山下はそこまでしなくても思うぐらい、自分の考えを外からの言葉で語ることに自制的であった。（最近では、意識的に外からの視点と内からのまなざしを接合させようとしているように見える。）

6、百姓は文化や学をつくらなかったのか

いろいろな本を読んできたが、「百姓は、日本の文化や学問を形成することはなかった」というようなことを書いたものばかりで、「じつは百姓こそが、文化をつくり、知の集積を行ったのだ」と書いたものは、ほとんどない。文化や学というものが、知識人のものなら、べつにそれでもかまわないと思うが、ほんとうにそうだろうか、と考えてもいい時代になったのではないだろうか。なぜなら百姓がこれほど減ってしまうと、語らなくても暗黙の了解が得られる、という世界がなくなってきたからだ。

百姓という言葉などなかった頃、今から9000年前の縄文初期の遺跡である上野原遺跡（鹿児島県加治木市）を先日、見学して驚いた。すでに立派な家屋を建て、土器も焼成し、燻製も行い、漆や斧も使って

いる。今日の考古学では（こう言わざるを得ないのは、学の功用を認めているからこそだが）縄文時代から、すでに農耕は始まっているというのが定説だ。農耕という文化は、百姓がつくったのではないのか。縄文時代から、さまざまな生活の知恵を先人は集積し、伝承してきた。これは近代的な学ではないが、立派な「知の体系」である。ところが、こうした知に注目し評価するのは、考古学や民俗学ではない。

私は田んぼを耕しながら感じる。この田んぼは私が開いたものではない。少しでも深く耕そうとしているが、すでにかかなりの深さの土は耕され、できている。できるだけ有機物を入れて肥やそうとしているが、すでにかかなり豊かな土になっていて、無肥料でも五俵は確実にとれる。田植え後50日は絶対に水を切らさないようにしているが、その水をたたえてくれる畦の石垣の石の数々、数万個の石はすでに積み重ねられて、畦になっている。毎年水路の修理に二日ほどかかるが、この二百メートルの水路を川から引いて来るために、先人は何ヶ月かかったことだろう。

この田んぼを開いた数百年前の百姓の名前を私は知らない。いつも感謝の気持ちがかみ上げてくるが、お礼をしようにもしようがない。ただ、せめて耕し続けるだけだ。もちろん自分と家族の糧を得るためでもあるが、それだけではない。田んぼを開いた先人と天地へお礼をするためにも、耕し続ける気持ちが生まれてくるのはどうしてだろうか。

百姓は合理的なものだけで百姓をしているのではない。あえていえば、非合理的なものに突き動かされながら、働いている。その正体はなんだろうか。

釈迦は覚りを開いたときに、つまり生きることの苦しみから脱却するための方法を発見したときに、こう思ったと言う。「この法（真理）は世の常の流れにさからい、とても深く、とても微妙で、とても精緻には知ることができないものだ」と。だからこそ、彼は「苦勞してやっ」と得たものを、なぜ人に説かなくてはならないのか。説いてわかってくれる人はいるのだろうか。」と悩んだそうだ。（これは小乗仏典にく

わしく書いてある)

なぜ釈迦を持ち出したかというところ、百姓にとつての「学」とは、こういうものではないかと気づいたからだ。もし釈迦が説法を決意しなければ、彼の覚りは彼の死とともに消え去り、何も残らなかつただろう。多くの百姓の気づきがそうであつたように。

このことに気づいたすごい百姓があつていた。二宮尊徳である。彼の歌、

音もなく香もなく常に天地は書かざる経を繰り返しつあめつち

天地のあらゆる様子はまるで「経」を繰り返しているようだと、二宮は言う。天地有情からのメッセージを、彼は釈迦の説法⇨教え⇨経になぞらえている。稲や田んぼの風景から、仕事の要請を読み取ることは、百姓なら当然のことだと思われる。それは、書物に書かれていること、技術書に記載されているマニュアルとはまったく別の様式の読み取りである。こうした読み取りを単に対象の「観察」だとしてきたのは、科学の体質であることは言うまでもない。

ここには単に天地自然の様子を観察しているだけではなく、それを「経」として読み取っている百姓がいるのである。こう言うとき、その「経」とは「自然の法則」のことでしょう、と理解する人が多いかもしれない。これは決定的外れとはいえないが、根本的に次元が違うと言わざるをえない。

つまりすぐに「自然の法則」だと見てしまうのは、外からのまなざしであつて、あくまでも自然を対象化して、人間の外に置いている。百姓なら天地の森羅万象は、天地からのメッセージだと受けとめるだろう。天地の(田畑や作物や天候や風景の)声を聞くのである。こうした感覚は、松田喜一などの農本主義者によく受け継がれていた。

7、究極のばらまき(小農だけでなく、ささやかな人生の擁護のために)

山下は『小農救国論』で、戸別所得補償などを評価して、「バラマキ

は、なせいかんのですかね。」と言い切っていたが、政策のあり方を考えていると、究極のばらまきが一番いいと、私は感じている。それは「ベーシックインカム」のことだ。欧米で真剣に検討され、一部が実施されている。じつは民主党時代の「戸別所得補償」や「子ども手当」もこれをつまみ食いしていた。

どういうものかと言うと、たとえばこういうものになる。「全国民に、無条件で(所得や資産や年齢に関係なく)毎月10万円と、子どもがいる家庭には子ども一人当たり5万円が、国家から支給される。」これを本格的に提唱した運動は、アメリカのシングルマザーたちが、家事労働を「ただ働き」にせずに「対価」を求めたものだった。この政策で労働は仕事に戻る可能性がでてくる。詳しいことは、解説書がいつぱい出ているので、読んでほしい。(『ベーシックインカム入門』光文社新書など)

これは私たちが提案している、農業への「環境支払い」と通じるものがある。山下や私の言う「よか仕事」や「カネにならない百姓仕事」は、「ただ働き」である。しかし、その成果や影響は、社会の「公益」(国益でもある)となつて現れる。これを評価する価値観と、政策が真剣に検討され始めているのである。ただ「バラマキ」には、根拠と理由と思想が必要だし、何よりもそれを表現せねばならない。ベーシックインカムや「環境支払い」には、それがあるが、これまでの農政のバラマキには、それが希薄だ。これは資本主義社会にあつて、資本主義を越えていこうとする試みだと考えたい。

「小農学会」は、ささやかに、じっくり、九州の片隅で、資本主義(経済成長)が早く終わるように、いや資本主義が終わっても何も怖がることはないと思ふやきながら、互いの考えを深め合い、そして、表現する寄り合いであつてほしい、と私は期待する。(2015年11月29日)

付記：農の「精神性」については、「農と自然の研究所」のホームページに連載をしていますので、参照してください。

<http://hb7.seikyoku.ne.jp/home/N-nune/>

大会宣言

一つ われわれは農の神髄は小農に在ると確信し、その研鑽、実践と普及に努める。

一つ われわれは農はお天道さまのもやい仕事であることを認識し、自然の営みに沿った農を実践する。

一つ われわれは農の使命は人類の生命の維持であることを理念とし、すべての人々にその恩恵が届く社会を目指す。

小農学会 設立総会

二〇一五年十一月二十九日

《「小農学会」入会のご案内》

小農学会へは研究者、農家に限らず、週末ファーマー、体験農園の参加者、産直で農家と提携を結んでいる消費者、半農半Xを実践されている方など、農に関心のある方ならどなたでもご入会いただけます。年会費は3,000円（入会金はいただいていません）です。

会員の皆様には学会誌をお届けするとともに、総会やシンポジウム、現地研修会のお知らせのほか、随時、活動の報告なども差し上げます。

活動の報告や連絡事項のほか、メディアの記事や会員による論文などを、学会のメーリングリストで逐次お知らせしていきます。メールアドレスをお持ちの方は、ご入会の際にお知らせください。

◎お申し込み方法

下記の「小農学会」事務局へ、次の項目を郵便ハガキ、FAXまたはメールにてお知らせいただき、左記の「ゆうちょ銀行」に年会費をお振り込みください。

- (1) お名前
- (2) フリガナ
- (3) ご住所
- (4) 電話番号
- (5) メールアドレス(お持ちの場合)

◎年会費のお振り込み先

ゆうちょ銀行 17880-32058051 小農学会

「小農」 創刊号 設立総会特集

2016年4月20日 発行

発行 小農学会

「小農学会」事務局

